

放心したやうに口を少し開いて黙々として人形にクツツいてゐる文五郎の姿を見るたびに、あゝ健在なりとあたかも古木の美くしきを見るやうであるが、今、師を樂屋に訪ねて感ずることは伏見人形の裏を見るやうな色彩の省畧された文五郎さんでした。

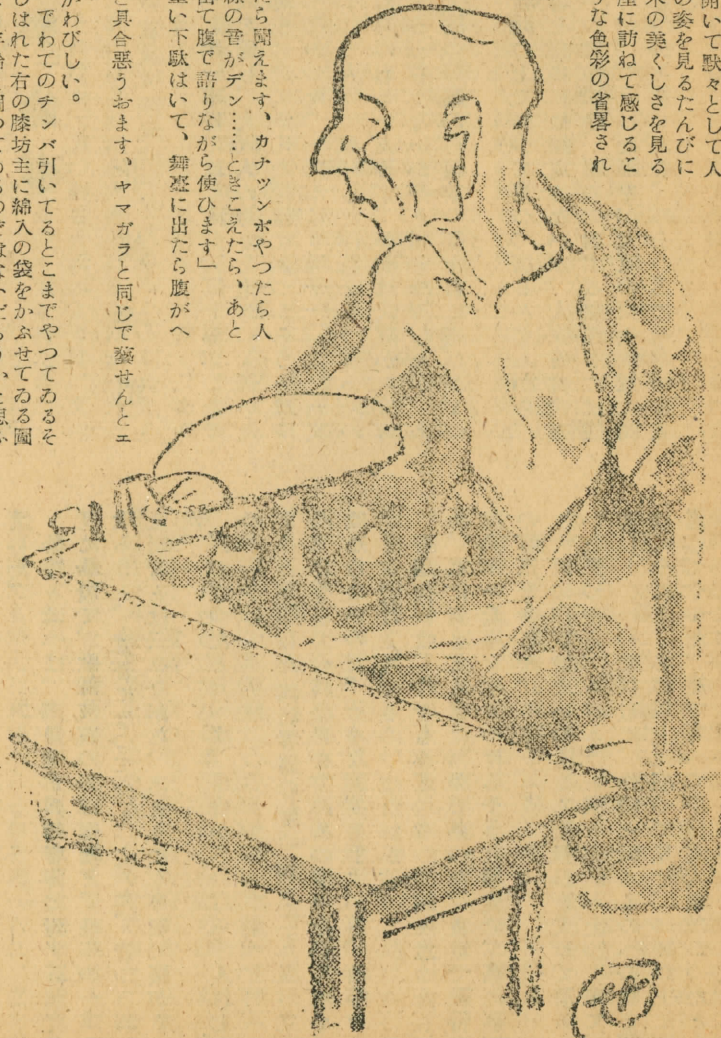
また、わしの藝談でも聞きにきたのかと思つたのか、風呂あがりの細い老骨にゆかたを引つかけ、話しだけはカミシモを着て今迄何百べんも語りつくした、藝談ではあるがイタにつくよりモウ鼻につくものであつた「耳が遠いのによく三味線や太夫の聲が……」

「そら、少し大きな聲やつたら聞えます、カナツンホやつたら人形が使へまつかいナ、三味線の管がデン……ときこえたら、あとはわが腹に文句がズー!と出て腹で語りながら使ひます」
 「腹といへば一時間以上も重い下駄はいて、舞臺に出たら腹がへりまつしやろ」

「舞臺は腹を空かして出んと具合悪うおます、ヤマガラと同じで藝せんとエサもらエまへん」

側の電熱の上のニキヒラがわびしい。

「歌舞伎座の文楽(新國劇)でわたのチンバ引いてるとこまでやつてゐるぞうや!」とリニューマテで少しはれた右の膝坊主に結入の袋をかませてゐる圖を見てゐると、この人は藝より年齢と闘つてゐるのではないだらうかと思ふ



その五

吉田文五郎

繪と文 藤原せいけん